

## 末法到来と阿弥陀仏信仰

親鸞聖人のご生涯について、まずはその時代背景を少し見ていこうと思います。

時代は平安期から鎌倉期へと移り変わる大きな社会変動の時代です。この時代は、古代社会から中世への移り変わりの変動期といわれております。古代社会というのは、公家を中心となっていた時代で、藤原一族を中心とした貴族たちが国を治めていました。ところが鎌倉時代に入りますと、それまで貴族の番犬のような役割を担っていた武家が台頭いたしました。平家の隆盛にみられるように、公家に代わり武家勢力が大きな力を発揮することとなります。これが古代から中世、平安期から鎌倉期への移りゆきです。

これらのことは社会構造から見ていえることですが、実はそれよりもっと大事なことがあります。それは「末法の到来」ということです。末法到来とは仏教の時代観・歴史観といえるものであり、お釈迦さまが涅槃に入られてから、時が経つにつれて、人心は荒廃し、世の中は乱れ、自然災害や疫病が流行り、やがてまもなく暗黒の世の中がやってくるかとされております。これを末法の到来というのです。

このように、仏教の歴史観では時代を正法の時期・像法の時期・末法の時期という三つの時期に分けて考えます。親鸞聖人も末法の世であることを深く悲嘆されて、八十六歳の時にまとめられた「正像末和讃」の中に収められている詩句によって、顕かにされています。

釈迦如来かくれましたして

二千年年になりたまふ

正像の二時はをはりにき

如来の遺弟悲泣せよ

〔「正像末和讃」『註釈版聖典』六〇〇頁〕

### 【現代語訳】

なんとという世の中になったことだろう。

お釈迦さまが涅槃に入られてから二千年余りも過ぎると、この世は末法の時代を迎えるというが、正にその通り、世の中は乱れに乱れ、人心が荒廃してきたとは、な